

昔むかし、あるところに、王さまがいました。王さまには美しいおひめさまがありました。おひめさまが年ごろになつたので、王さまはおひめさまの夫になる人を決めようと思いました。そこで、こんなおふれを出しました。

「ほんとうのことはひとかけらも入つていない、まつかなうそをつく」とができた者をひめの夫にむかえる」

おふれを聞いて、国じゅうから、男の人たちがやつて来ました。

いよいよ、うそつきくらべの日になりました。審判は大臣たちです。大臣たちはおひめさまをとても愛して、だれにもやりたくないと思つていました。それで、ほんのちよつとしたことにでもいちやもんをつけてやろうと待ちかまえていました。

まずは、白髪のじいさんが大臣たちの前に出ました。じいさんは話しあじめました。

「昔むかし、一頭の雄牛おうしがいましてな、この雄牛は計りきれないほど大きくて、立ちあがると天までとどきました。雄牛が雲にさわると、雲が切りさかれて、雲の血が雨のようにふつてまいりました」

大臣たちは、じいさんをさえぎつていいました。

「い、ら、それはうそ話ではない。ほんとうのことだ。その雄牛が死んだとき、神さまが雄牛の皮で小太鼓こだいこをつくれられたのだ。神さまが小太鼓をたたくと、空でかみなりが鳴りひびき、雨がふりだすのだ。これはほんとうの話だ」

じいさんは、あきらめて引きさがりました。そのあと、たくさんの男たちがつぎつぎと話をしましたが、大臣たちはみんないちやもんをつけてしまいました。さいごに、ひとりの若者わかものがのこりました。若者は話しあじめました。

「ぼくは森の狩人かりうどです。ある日のこと、森の中へ入つていくと、ぞうのむれに会いました。それはたいへんな数のぞうで、もし数えたとしたら三十万頭はいたと思います。ぼくはうれしくて、このぞうのむれをいつぺんにつかまえようと思いました。そこで、ゴムの木からしづくを二、三てき取つて、火でべつとりとて、ゴムのりを作りました。それから細い木のえだを集めてきてゴムのりにひたしてから、そのえだを森のあちこちに立てました。そうしたら、三十万頭のぞうが一頭ずつ、えだにくつついて動けなくな

つたのです。ぼくは髪かみの毛を二、三本ぬいて、それでぞうたちをつぎつぎにしばってしまいました。そして長い長い行列にして、この町につれてきましたの

若者がひといきつくと、大臣たちはいちやもんをつけようと口を開きました。すかさず若者はいいました。

「町に着くと、ぼくは、そのぞうたちを一頭のこらづ、ここにおられる大臣たちに売つてしましました。一頭につき、三十万銀貨ぎんかでした。みなさんは、ぼくのところに来て、ぞうをお分けになりましたね。それでぞうはみんななくなつたのです」

若者は、そこまで話すと口をつぐみました。王さまが、大臣たちにいいました。

「どうだ、これはどうもうそ話のようだな」

大臣たちは、おひめさまをわたしたくなかったので、いそいでいいました。

「これはほんとうのことです」といいます。私どもは、この若者のぞうのむれを分けました」そこで若者は、勝つたと思いました。そして王さまの足もとにひれふしていました。  
「王さま、どうか証人しょうにんになつてください。大臣がたはいま、わたしからぞうを買つた」とをおみとめになりました。じつは、わたしがここにまいりましたのは、ぞうのお代をいたぐためなのです。大臣がたには合わせて九千億おくの銀貨しゃらを支払つてもらわなくてはなりません。もしきょううじゅうに支払つてくださらなかつたら、みなを処刑しょけいしてくださいませ」

大臣たちは、ふるえあがつていいました。

「王さま、あれははじめから終わりまで、ぜんぶうそでござります。わたしたちはぞうのむれなんて、見もしませんでした」

王さまはいいました。

「なるほど。おまえたちはこの話はまつかなうそだというのだな。それならこの男の勝ちだ。むすめはこの男とけつこんさせよう」

おひめさまは若者とけつこんし、大臣たちはたいへんくやしがつたということです。

\* 狩人 鳥やけものをとつてくらしている人。獵師りょうし

出典 『語りの森昔話集1 おんちよろちよろ』村上郁再話  
原話 『世界の民話10』小澤俊夫訳／ぎょうせい